〔古今名物類聚茶入〕凡例

凡名物と稱するは、慈照相公○足利義政茶道甄器にすかせ給ひ、東山の別業に茶會をまうけ、古今の名畫妙墨珍器寶壺の類を聚め給ひ、なを當時の數奇者、能阿彌相阿彌に仰せありて、彼此にもとめさせられ、各其器の名と價とを定めしめ給ふ、次で信長秀吉の二公も亦此道に好せ給ひ、利休宗及等に仰せて名を命じ、價をも定めしめらる、後世是等の器を稱して名物といふ、其後小堀遠州公古器を愛し給ひ、藤四郎以下、後窰國燒等のうちにも、古瀨戸唐物にもまされる出來あれども、世に用ひられざるを惜み給ひ、それがなかにも、すぐれたるを撰み、夫々に名を銘せられたるより、世にもてはやす事とはなれり、今是を中興名物と稱す、それよりしてのち、古代の名物をば大名物と唱る也、○略中

小壺を燒ことは、元祖藤四郎をもつて鼻祖とす、藤四郎本名加藤四郎左衞門といふ、藤四郎は上下をはぶきて呼たるなるべし、後堀河帝貞應二年、永平寺の開山道元禪師に隨て入唐し、唐土に在る事五年、陶器の法を傳得て、安貞元年八月歸朝す、唐土の土と藥とを携歸りて、初て尾州瓶子窰にて燒たるを唐物と稱す、倭土和藥にてやきたるを古瀨戸といふ、古瀨戸は總名なり、大形に出來たるを大瀨戸と云なり、此手小瀨戸に異なり、小瀨戸といふは小形に出來たるをいふ、此手大瀨戸に異なり、入唐以前やきたるを、口兀、厚手、堀出し手といふ、大名物は古瀨戸唐物なり、誠に唐土より渡たるものをば漢といふ、是は重寶せぬものなり、唐物と混すべからず、堀出し手といふは、出來惡敷とて、一窰土中に埋みたりしを後に掘出したりとなり、一說には遠州公時代に掘出したるともいふ、總て入唐以前の作は、出來田夫にて下作に見ゆるなり、古瀨戸煎餅手といふあり、これは何れの窰よりもいづる、窰のうちにて火氣つよくあたり、上藥かせ、地土ふくれ出來たるものなり、後唐の土すくなく成たるによりて、和の土を合てやきたるを春慶といふ、春慶は